

周辺からの記憶 5

～2011年 むつ・遠野・福島～

村本邦子（立命館大学）

2014年11月6～7日、日本平和学会2014年秋季研究集会分科会企画で、「原発に立ち向かう水俣病当事者と支援者」と題する水俣フィールドワークに参加した。水俣と福島がある意味で相似形であること、水俣のもやい直し、土地の自然や文化を軸にした地域復興を東北に活かせないのだろうかと思いながら、自分なりに勉強してきたものの、もうひとつよくわからない感じがあった。今回、先人たちの導きを得て、相思社を訪れ、当事者や支援者の方のお話を聞き、参加者と語り合うなかで、頭がすっきりと整理され、水俣と福島のことを考えていく軸ができたような気がする。

相思社は、1974年の落成から、水俣病未認定患者運動の拠点として活動してきたが、時代に伴う紆余曲折を経て、現在は、検討を重ねつつ、①患者とのつきあいの深化・拡大、②水俣病事件を伝える活動の拡充、③地域との主体的な関係の構築へとその役割をシフトしているようだ。お話を聞いた一人ひとりが個性的で、それぞれが自分なりに感じたこと、考えたことを「私」として語っていたことが印象的だった。たとえば、もやい直しに対する評価もそれぞれで、リアリティがあった。

政府は、ロジックの立て方、分断のテクニックなど、水俣から「悪い教訓」を福島へ持って行っているのではないかという。実際、登場人物たちは同じだ。何とかそれを逆手に取れないものか。福島について、「水俣病は終わらない。被害に遇ったことをきちんと受けとめて責任をとってもらうことが大切。水俣病は公害の原点であると言われているが、利用されないよう闘っていきたい」とおっしゃっていた。

11月7日、鹿児島県議会は川内原発再稼働推進を求める陳情を採択した。フィールドワーク参加メンバーのなかには、早朝に議会に向けて出発した者もいた。私の故郷は川内原発から30キロである。これから日本はどのような方向へ向かっていくのだろうか。予断を許さない。

2011 年 9 月 22～24 日 むつ

<下北むつへ>

時は、2011 年 9 月 22 日に遡る。陸路で、東京、仙台、遠野と営業回りに出ていた平田さなえさんと私は、花巻、盛岡、野辺地を經由して、夕刻、はるばるむつまでたどり着く。三沢経由で京都からやってきたプロジェクトチームと合流するが、彼らは空港からの途中、六ヶ所村と東通村を案内してもらったという。原燃 PR センターは、人っ子ひとりいなかったそうだ。

2011 年 6 月 1 日の朝日新聞には、「原発不安、口重く現場から～下北半島」という記事が出ている。東通村の女性は、自宅で東通原発と大間原発から半径 20 キロの円を下北半島の地図に描いてみたそうである。「逃げ場がない。海に逃げるしかない」「村では、いま反対も賛成も言うことはタブー」。

「周辺からの記憶 3」に詳しく書いたが、下北は原子力船むつや六ヶ所村に代表されるように原発との関係が深く、日本原燃が本社を置く。陸海空の自衛隊基地が配備され、アメリカ空軍の三沢基地もあって、人口 6 万人ほどのむつには、災害復興のために被災地に赴く自衛隊や原発関連の仕事に従事する人が多く、その子どもや家族もさまざまな影響を受けているということだった。むつでも、原発への不安がかすかに聞こえてくる。

<むつでのプログラム>

9 月 23 日 10 時、むつ市立図書館会議室にスタッフが全員集合する。児童相談所職員と立命館からのメンバーで合わせて 20 名ほど。打ち合わせ、リハーサルを経て、

13 時開会。いささか物々しく、緊張した空気が漂う。企画者として私が最初に挨拶した後、関谷道夫児童相談所所長が挨拶され、団士郎さんの講演、村本の支援者支援セミナーと続き、この間、院生 2 人は児童相談所職員と一緒に子どもたちの託児を担当してくれた。24 日は 10 時から、中村正さんの「父と子の絵本ワークショップ」、村本の「ママたちのいどばた会議」を並行した。ちらしと報告は、

<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/gsshs/tirasu/mutsu.pdf>

<http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsai/project/sinsaiproject-mutsu.html>



むつ市立図書館

団さんは、漫画展を見た方々から、それぞれの物語を聞くことになったようだ。年齢、性別や境遇によって思いを重ねる作品は違うが、自身が内面に抱える物語が生きるエネルギーになり、「なにかを見て、投影できるなにかを抱えつつ生きている自分を実感できることが、他者と自分の繋がりを感じ取れる一方法ではないかと思う」と報告している。



家族漫画展

中村さんの「父と子の絵本ワークショップ」についても、HPで詳細に紹介されているが、お父さんが我が子に絵本を読んでやるという最後の場面は何とも暖かくて微笑ましく、父子のよい思い出になるだろうと思った。

支援者支援セミナーは、子育て支援に焦点をあてることにし、子育て支援大変、子

育て大変、子ども大変…という循環を逆に回して、子育て支援楽しい、子育て楽しい、子ども楽しい…という循環にするようにと組み立ててみた。ケア役割の質をあげるためには、自己犠牲でなく、主体的な人生を充実させる必要があるし、上手に援助できるようにするためには、上手に援助される体験を重ねることも重要だ。

いくらかのバズセッションの後、むつの支援者の課題を挙げてもらうと、他職種の連携がうまく取れていないという声があがってきた。「来年は、多職種で小さなグループになって事例検討をするとよいかもしれませんね」と言ってみたが、さっそくこれを取り入れてもらって、翌年からは、この形のセミナーをすることになった。継続してやれることの利点は、土地のアセスメントをしながらプログラムを工夫していけることだ。

「ママたちのいどばた会議」では子育ての大変さを分かち合うグループをファシリテートしたが、「子育ては大変だけど」という導入に違和感の声があがった。

私が子育て支援を始めた 1990 年代前半、子育て支援という言葉さえなかった時代だが、母親たちは子育てを大変だと感じることを恥じており、世の中は、「昔のお母さんは電化製品もなく、子どもも多いなかで普通にやっていたのに、こんな楽な時代になって、子どもも満足に自分で育てられないなんて！」という批判の声に満ちていた。社会に向けて「今、子育ては大変なんですよ」と訴えつつ、母親たちに「子育てを大変だと感じて当たり前なんですよ。みんなの助けを借りましょう」と伝えることが、母親たちの安心につながっていた。



支援者支援セミナー

ところが、十年も経つと、少子化対策から、「子育ては大変だから、子育て支援」というのが当たり前になり、まるで子どもがお荷物のような扱いになって、それではあんまりだと思えるようになった。子育ては大変なところもあるが、本当のところ、楽しく素敵なことがたくさんある。「母性神話」が批判され、「子育て大変」と語り尽くされた都会では、一周回って、「子育て、楽しいことがたくさんあるよね！」という方が新鮮である。地方都市へ行っても、あまり違いを感じない。

でも、ここでは暖かい支え合いや地域での子育てがまだ生きていて、祖父母や親戚、近所の人たちが一緒になって子育てしていた。移動層もあり、個別の状況はさまざまだったが、必ずしも母親が孤立して一人で子どもの責任を背負っているわけではなさそう。そもそも、「ママたちのいどばた会議」というタイトルに多世代の母親たちが集まったというのも興味深いことだった。これは、この土地の力のひとつと記憶して、来年につなげよう。

もうひとつ感心したことがある。震災の話題のなかで、直接的被害は聞かなかったが、被害の大きかった八戸に家族や知人が

いるという方は多かった。震災後3日は停電だったが、テレビがついてから、あまりの惨状にショックで泣いたと言う女性たちがいた。彼女たちは、後日、子どもを八戸まで連れて行き、被災後の光景を見せたという。「歴史に残る大きな出来事だから、見せておかねばなるまい」と感じたそう。陸に上がった船や破壊の様子に、テレビではバーチャルなものと感じていたらしい子どもも、実物を見てびっくりしていたらしい。あるがままの現実子どもと共に向かい合うという姿勢は、なんともかっこよいではないか。近年とみに弱くなっている部分だ。



2011 in むつ スタッフ

<プログラム後に>

一日目の夜、児童相談所のスタッフたちと一緒に懇親会をした。その日が誕生日という方がいらっしゃって、サプライズで大間のマグロが登場した。大間の漁師たちは、100～200 キロのマグロを年間2～3匹獲ると、悠々と生活ができてしまうという。しかし、その2～3匹が容易ではない。獲られなければ無一文である。運良く漁に成功した者はよいが、そうでなければ生活保護を受けることになる。ギャンブル性の高い仕事である。そこに原発がきたわけだ。むつ

から帰った翌月、下北半島 7 市町村長連絡会議のニュースを目にした。会議は、福島第一原発事故を受け、原子力防災について協議する目的で、6 月、むつ、東通、大間、六ヶ所、横浜、佐井、風間浦の首長をメンバーに発足していた（毎日新聞、2011 年 10 月 12 日）。

プログラム終了後、空港への途上、関谷所長が、田んぼのなかにたくさんの風力発電が並ぶ美しい場所を経由してくださった。下北の地理はさっぱりわからなかったが、後から思うに、横浜町だったようだ。お天気がよく、青い空、緑の田んぼ、沸き立つ白い雲、そして、力強く回る風力発電の光景は、以来、私にとって下北の原光景となっている。



下北の風景

「周辺からの記憶 2」に書いたが、仙台は復興支援イベントラッシュで、現地の人々はお疲れの様子、残念ながらご縁がなかったこともあり、2011 年度、宮城でのプロジェクトは見送ることにした。

2011 年 11 月 3～6 日 遠野

<遠野のこと>

遠野は、柳田國男の『遠野物語』の舞台であり、座敷わらしや河童の伝承で知られる小さな街である。人口は約 3 万。増えてはいないが、世帯数が増えて核家族化が進み、共働き家庭が多い。沿岸と内陸を結ぶ交易拠点として発展した経緯から、相互扶助の意識が強く、大槌から陸前高田まで沿岸部に半径 50 キロに位置し、車で 1 時間という条件にある。震災直後から後方支援の中核地となり、官民一体となった「災害救援のモデルケース」として注目を集めていた。

皆より 1 日早く出発し、遠野図書館・博物館の向かいにあるホテル「あえりあ遠野」にチェックインして、平田さなえさんと合流する。ちょうど文化の日、「あえりあ遠野」と隣接する市民ホールで「遠野文化フォーラム～文化の力で元気な町を」が開催されることを知り、せっかくなのでのぞいてみることにした。『遠野物語』誕生百年を迎え、2011 年 4 月に設立されたばかりの遠野文化研究センターの主催である。子ども語り部、林隆三の朗読ステージ、「遠野文化賞」表彰式、山折哲雄講演「災害と文化」の四部構成になっていた。これが予想以上に面白く、この後、繰り返し振り返って参照することになる重要な基点となる。

第一部「子ども語り部」では、小友小学校と土淵小学校の小学六年生の女の子 6 名の語り部が、順番に「むがす、あったずもな」と語り出し、座敷童やオシラサマなど、ひとつずつ物語を語って、「どんどはれ」と閉じていった。遠野弁が耳に心地よい。

第二部で朗読を披露した林隆三も、子どもたちの語りに気後れを示したほどだ。

第二部の朗読は、『遠野物語』第 99 話だった。明治 29 年の三陸大津波にまつわる話で、月夜の晩、福二という男が、田の浜（山田町）で、津波で亡くした妻が男と歩いているのを見かける。実は、昔、妻と相思相愛の仲にあった男で、今はあの世で夫婦になっているのだという。「おまえ、子どもが可愛くないのか」と声をかけると、妻は悲しそうな顔をして、泣きながら足早に去って行ったという話だ。「これは、いったいどういう物語として理解したらいいのだろう!？」と軽く衝撃を受け、面喰ったというのが正直なところだ。しかし、考えてみると、『遠野物語』とは、そもそもそういう物語である。むしろ、すぐにわかりやすいプロットに落としこもうとすること自体に問題を感じるべきなのだと考えるきっかけになった。

トークの部分では、山形出身だった母親が子どもの頃にしてくれた捕鯨の話の思い出が語られた。繰り返し母を真似て語る林隆三の表現には迫力があり、ラジオしかなかった時代、想像力を刺激する方言の力と、感情が先に動くので知識への好奇心と感動があったという話が強調された。

第三部は「遠野文化賞」の表彰式で、遠野小学校の全校表現活動「遠野の里の物語」が表彰された。イメージとしては、全校生徒が出演するミュージカルのようなものだが、30 年に渡って受け継がれ、親子二代にわたって共有され定着している。この秋、東京の国立劇場で開催された「文化による復興支援」シンポジウムにも出演そうだ。30 年続けてきたという事実はたいしたもの

だし、自分の言葉で、堂々と伝承の責任を語った児童会長の男の子の受賞スピーチには、これがその教育成果かと感心した。

第四部、山折哲雄の講演では、遠野の自然の豊かさが文化の原点であること、東の三大詩人は美しい自然と盆地の閉鎖性の葛藤を昇華するように生まれた。他方、峠によってつなぐという発想は古来からあったのではないかと。死者との関係性は不確かなもの。地震学者寺田寅彦が、日本には地震が多く、自然は予測不可能なものであるから「無常観」が形成されたとした話などを紹介し、科学は自然を制御できるのかと問いかけた。

「あえりあ遠野」では、「昔話のタベ」として、毎夜、語り部の話を聴くことができ、ホテルの各部屋には、聖書の代わりにと言おうか、水木しげるの漫画『遠野物語』が備えつけてある。なかか乙なもてなしではないか。

翌日は、遠野市市役所・福祉の里を訪問してご挨拶をし、遠野の現状について伺った。長期的支援の申し出はありがたいと、今後の展開について助言をしてくださった。難しいのは、たくさんの支援オファーがあり、オプションとして提示したら、沿岸部の管理職が翌日から仕事に来なくなったということがあったそう。現地のプレッシャーになってしまうのでは元も子もない。

傾聴ボランティアは役に立っているようで、「意外と専門家より学部生のボランティアがよいのかもしれない。答の出ないこの時期、ただ聴くだけが有効のように思う。ただし、ニーズは刻一刻と変わる。他のニーズもあるはず」ということだった。

また、前日の文化フォーラムでも挨拶を

されていた本田敏秋市長のことが話題に挙がった。2002 年よりずっと遠野市長として地域復興政策を次々と展開されてきたアイディアマンとして有名だ。立命館としてどんどんアイディアを出したらいいのではないかということだった。

今回会場となった「蔵の道ギャラリー」もそうだが、遠野を歩くと、公衆便所まで白くかわいらしい蔵造りになっていて、「民話のまち遠野」としてお洒落に売り出していることがわかる。また、あちこちにイベントのポスターを見かけ、文化復興を大きく打ち出していた。私たちが目指しているのは、どちらかと言えばもっと地味なもののだが。



オシラサマ



カッパ淵



伝承園

<遠野でのプログラム>

11 月 5 日、蔵の道ギャラリーで、午後のプログラムの準備をする。遠野のチラシと報告は

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/tono.pdf>

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-tono.html>。

蔵の道ギャラリーは、蔵を活用してつくられた木造の建物。1 階にギャラリーと多目的室、2 階に子どもの広場、屋根裏には昭和の懐かしいおもちゃやキャラクターグッズが展示されている。

漫画展にもそれなりに人が入る。今回、お世話になった遠野市の方々が覗きにきてくださる。立ち話程度に子どもたちの状況を聞かせてもらう。遠野の仮設住宅には 49 世帯中、10 世帯に子どもがあるが、親戚の家に身を寄せている家族も少なくないという。尾上さんが「あえりあ遠野」の「昔話のタベ」でお話したという語り部のおばあさんも、りんごを持ってきてくださった。よくよく聞くと、この方は私たちも知っている臨床心理士のおばさんだった。りんごを届けてくださった校友会の方もあった。

駅前の商業施設トピアにあったチラシを

見て来てくださったご夫婦は、長く傾聴ボランティアに関わっておられるという。十年前から著書を通じて私のことを知っていて、南京のプロジェクトのことまで知っておられた。さまざまなご縁があるものだ。みなさん応援に来てくださったのだろう。互いに応援しながら、応援されている。

6人連れの女性たちは、宮城の亘理で被災して、ようやく少ししゃんとしたので仲良しグループで旅行に来たのだという。何人かはじっくりと見て回られ、あれこれ語ってくださった。家を流され、避難所から来た方もあるという。おひとりは、「少しは忘れられるかと思って来たのに、私、無理。」と立ち去られた。それぞれなりの回復のペースがあるのだろう。



蔵の道ギャラリー



午前から近くで遊んでいる子どもたちにチラシを配り、午後二階スペースでゲームをしている子どもたちに声かけしたので、入れ替り立ち替わり、30名ほどの子どもたちが来てくれた。チラシを見て来てくれた一人をのぞけば、皆、遠野小学校の子どもたちだという。文化フォーラムで聞いたばかりの表現活動のことを聞くと、誇らしそうに披露してくれた。学年ごとに演じる題目が決まっており、1年生は河童踊り、2年生は雪女、3、4年生は遠野三山、5、6年生はオシラサマであり、1つ上の学年が次の学年に教えていくのだそうだ。そんなやりとりをしながら、尾上明代さんによる「みんなで楽しく劇遊び」と渡邊佳代さんによる「風船で遊ぼう」のプログラムを行う。



みんなで楽しく劇遊び



風船で遊ぼう

翌日午前は、村本の支援者支援セミナー。グループ形式でそれぞれの思いや考えを語り合った。地元の支援者たちからは、東北の文化の素晴らしさとともに、懸念も含め、東北のコミュニケーションが閉鎖的で、暴力が当たり前、自殺者が多いという話題が出ていた。「傾聴は、ただ聴くこと、ただ語られることにその人のすばらしさがあり、うなづきのテクニックなどいらない」という。被災地支援というだけでなく、対人援助や人間そのものについて考えさせられることが多かった。

午後は、会場を遠野市図書館に移して、団さんの漫画トーク。図書館に隣接する博物館は、遠野物語発刊百周年を迎えた昨年、リニューアルされたとのこと。遠野物語を中心に観光向けの建物としても力を入れて

いるそうだ。学芸員の前川さおりさんのお話によれば、スタッフたちは、沿岸部へ行って、文化財レスキューの活動をされている。また、博物館は、遠野で親戚の家や仮設で避難生活をされている人たちの居場所にもなっているようで、毎日来る人、何をすることもなくボーッと同じ場所にいる人がいるという。それを受けて、特別展開催時には、避難者は無料で入れるようにする予定であるということだった。図書館や博物館は、あの世とこの世の境目、共同体から離れて1人で体を休められる場所なのではないかという。細やかで鋭い人間観察だ。

漫画展や私たちの小さなプロジェクトも、歴史や文化の豊かなこの遠野の街に根付いていけたらいいなと願う。



<沿岸部へ>

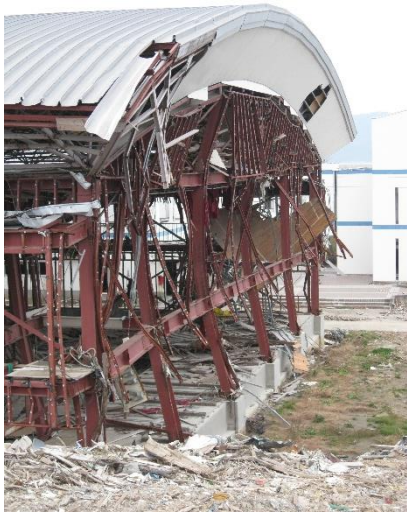
短い時間ではあったが、2 日目の夕方、レンタカーで陸前高田へと向かった。薄暗く寂しい国道を山間、川沿いに走り、沿岸部に出ると、広大な空き地に山のような瓦礫、見るも無残な建物の廃墟、自動車のスクラップ。人家が並んでいたろうと思われるところには、瓦礫の端から、片方だけの運動靴やつぶれたカセットテープ、子どものおもちゃがはみ出て散乱していた。

車のナビを見ていると、そこはつい最近まで郵便局や散髪屋やコンビニが並ぶ街だったはずで、あたかも目の前に生きた街や子どもたちの姿が浮かぶようだった。陸前高田は、市民会館や市民体育館など指定避難所の多くが天井まで水没し、市街地全域が壊滅的被害を受けたところだ。

「奇跡の一本松」を見て、大船渡の方へ車を走らせた。地理的な情報をまったく持ち合わせておらず、どこがどこかさっぱりわからなかったが、行けども行けども茫漠と広がる空虚に、ただただ立ちすんでしまう思いだった。写真を見返してみると、翌年、泊まることになる場所に行っていたようだし、駅舎の土台とホーム、線路しか残っていなかった駅はどうやら大船渡の駅だった。

地盤沈下で沼のようになってしまった街跡には、あちこちに小さな花々が哀しげに咲いていた。まるで廃墟となった未来都市の SF 映画の中に入ってしまったよう。言葉を失う。これが日本海岸沿いに延々と続いているのだ。いったいここからどうやって復興していったらいいのだろうと思うと、気が遠くなる。そして、あっという間に暗闇が訪れた。





2011年12月2～4日 福島

<福島>

福島県は、沖合の全域が震源域となり、大熊町にある福島第一原子力発電所付近で15m、隣接する富岡町で20mと高い津波が観測され、福島県災害対策本部発表（2011年6月30日現在）によれば、死者1709人、行方不明者245人、重軽傷者236人に上っている。死者の内訳は、南相馬市588人、相馬市447人、いわき市307人、浪江町112人、新地町100人であり、沿岸部の浪江町以北の4市町の死者・行方不明者は県全体の73.0%に達し、人的被害が集中した。

福島の被害は地震、津波に留まらなかった。3月11日14時47分、大きな揺れによって福島第一原発1号機、2号機、3号機の原子炉が緊急停止。地震と津波による電源喪失で、原子炉の内部や核燃料プールへの送水がストップし、3月12日15時36分、1号機水素爆発、3月14日11時1分、3号機水素爆発、3月15日6時10分、2号機爆発、格納容器損傷、同日6時頃、4号機原子炉建屋5階屋根付近損傷。「5/23・25 東京電力より原子力安全保安院に対する報告」によれば、1号機は3月12日、3号機は3月14日、2号機は3月15日に、それぞれ炉心溶融（メルトダウン）を起こした。

放射性物質は広範囲に広がった。とくに、3月15日、2号機の圧力抑制室の損傷によって最大量の放射性物質が放出された。これが南東からの風に乗って北西へ流れ、40キロ離れた飯舘村や60キロ離れた福島市で急上昇したところに、雨や雪が降り、土壌に沈着した。4月12日、国は、国際的な基準に基づく事故の評価を旧ソ連のチェル

ノブイリ原発事故と同じ最悪の「レベル7」に引き上げたと発表した。しかし、政府の避難指示には問題があった。

まず、2011年3月11日20時50分、半径2km以内の住人に、3月12日18時25分には、半径20km以内に避難指示が出された。次に、3月15日11時、半径20kmから30km圏内の住人に屋内退避が指示され、3月25日には自主避難が要請された。そして、4月22日、半径20km圏内が災害対策基本法に基づく警戒区域と設定され、民間人は強制退去、立ち入り禁止となった。

半径20～30キロ圏内の住民10万人以上が避難する混乱のなか、大熊町では、双葉病院に入院中していた認知症患者と隣接の老人介護施設の高齢者のうち227人が一時取り残された。入院患者132人は観光バスで200キロの移動を強いられ、介護施設に残っていた95人は、5日後、自衛隊に救助されたが、最終的に50人が衰弱死したとされる。なお、これは後に訴訟にもなっているが、数値はWikipediaによるもので、正確ではない。双葉町のHPには、死者119人（直接死11人、関連死108人）、行方不明1人とあり、「関連死」とされているもののなかに、避難に関わるものが含まれていると推測される。避難にまつわる混乱について、フィクションではあるが、園子温監督による『希望の国』によく描かれている(<http://www.kibounokuni.jp/>)。

4月22日に「警戒区域」「計画的避難区域」「緊急時避難準備区域」が指定されたわけだが、局地的に高い放射線量が観測されるホットスポットが問題となり、6月30日、伊達市が「特定避難勧奨地点」に指定され、その後、南相馬市や川内村にも拡大

された。これは、局所的に年間被ばく量が 20 ミリシーベルトを超える恐れのあるホットスポットについて、世帯単位で指定されるものである。避難の判断は住民に委ねられ、避難する場合には国が支援する。

「避難対象区域」と「緊急時避難準備区域」内に行政区域の全部または一部がある自治体は 2 市 7 町 3 村、人口としては合計約 15 万人に上る。なお、政府による避難指示は、年間被ばく量 20 ミリシーベルトを目安にしているが、チェルノブイリ原発事故では、年間被ばく量 5 ミリシーベルトを超えるとされるところで強制・義務移住、1～5 ミリシーベルトで希望移住の対象となったものである（大島・除本、2012）。

6 月 30 日現在、県内の地震、津波、原発事故による避難者の合計は 83,353 人に上る。避難先は福島県内の各市町村や県外各地へ広範囲に分散し、県外避難者は全国の 2014 カ所、35,892 人とされている。役場機能も、双葉町が埼玉県加須市へ移転し、その他の町村も、福島市をはじめ県内の他市町村への移転を余儀なくされている。

これらに対する東京電力による補償金の状況であるが、東京電力HPプレリリース（<http://www.tepco.co.jp/cc/press/index1112-j.html>）で確認することができる。東京電力は、4 月 15 日に福島第一原発事故の避難者に対して「仮払補償金」の支払いを決定し、5 月 31 日に取組状況を報告している。対象は、避難、屋内退避となった地域で、1 世帯当たり 100 万円（単身世帯は 75 万円）を約 5 万世帯に支払った。7 月 5 日、「追加仮払補償金」を約 16 万人を対象に 1 人 10 万円から 30 万円支払うと発表した。この他、中小企業者や農林漁業者に対

する仮払開始についても触れられている。

＜福島での漫画展＞

福島市は、阿武隈高地と奥羽山脈にはさまれた「中通り」に位置し、人口は約 30 万、いわき、郡山次いで県内 3 位である。地震、津波による被害は大きくなかったが、放射線被害は大きく、多くの避難者を受け入れている一方で、少なからぬ自主避難者をも出している。

初年度は、福島市中央児童相談所との共催、福島市の協力で、「チェンバおおまち」市民運動サポートセンターでプログラムを開催した。福島のちらしと報告は、<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/fukushima.pdf>
<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/sinsaiproject/sinsaiproject-fukushima.html>。

一階の展示会場はオープンスペースとなっており、向かい側には、ブースを仕切って、手作り商品、ネイルサロン、地元の物産などの小売店が並んでいる。地元ベンチャー支援策として、1 年限定でスペースの貸し出しをしているそうだ。団さんはそこで店主たちの物語を聞いたそうだが、お客さんたちの応援もあって、それぞれなりに頑張っていこうと一歩を踏み出されていた。





漫画展の感想ノートにメッセージを書かれる方は、いつもそれほど多いわけではないが、今回の福島では、メッセージを書いてくださった方が多く、とりわけ思いがあふれ出ているように感じられた。この時期、福島の人々は気持ちを固くし、思いを抑え込んでいたからなのかもしれない。いくらか紹介したい。

「拝見した作品は時間が経つ程に心に染み入る感じがします。余韻の残るものと思います。真に人の歴史ありですね。なにげない人生のように見えても人それぞれ喜びもあり悲しみもある。”戦い”の最中にある時はなぜ?どうして?と何かをうらみたいなる事もあるでしょう。でも、振り返ってみれば逆境にあったからこそ得たものの大きさ、重さもあります。このたびの悲劇もきっとそうなる時が来ると信じます。そんな事を感じさせていただいたひとときでした。ありがとうございました。」

「あたたかい話、ほっとさせられます。自分の歴史を振り返させられます。ありがとうございました。」

「日々の何気ない出来事の中にも人生の一步が刻まれる。負けずに一步、前へ進まなくてはならない。”生きることの大切さ”と”強さ”を考えさせられました。ありが

とうございました。」

「平和・平穏の中で暮らしてきました。いま心はキズついていると思います。福島県民よ歌いましょう♪」

「何が良かったか、何が悪かったかはその人自身しか決められないし感じる事ができないと思いますが、そういうことを少しでも安心して考えることができたらいいなと思いました。どうもありがとうございました。」

「各々の家族のあり方の中でふとどこにでもありそうな漫画の中に心が動かされます。どう生きてゆくか考えなくては・・・と思いました。」

「仕事の帰りにホーッとして涙です。それも笑い、笑顔と涙。私という自分、家族、親、子供、そして・・・老後の・・・『親になり』自分も親になりやっとなる親心。両親へのありがとう、の今晚電話します。『年をとり』自分も年をとりやっとなる老後。(なのでしょうね)。もう少々時間はありそう。絵の中に自分を置き読ませて頂く。絵とストーリー、言葉一句一句とても心暖かく・・・なりました。仕事疲れにやっぱ笑いのある絵、ストーリーは心のビタミン栄養ですね。ありがとうございます。さあ、明日も頑張ろう。楽しい人生に向けて。」

「死を迎えるその時、あーあ私の人生は楽しかったと云える様に」。感動でした。

「団先生の絵を見るのは初めてでしたが、こんなにスート心に入るものかと感動しました。今、人として大事なものを思い出させていただきました。」

「漫画展というタイトルから気楽な気持ちで見始めましたが、そこに描かれている

絵と言葉を読み重ねていくうちにどんどんとひきこまれていきました。誰も正しい答えをもっていない、答えがわかりづらい時代の中で、家族や自分を考え、見つめ直すよい時間をいただきました。」

<福島でのプログラム>

三階では、支援者支援ワークショップや子どもの遊びワークショップ、講演会を行った。プログラムを通じて、福島の人々が大変な負荷を抱えながらも、互いに思いやり合って、必死に頑張っている状況がひしひしと伝わってきた。

子どもワークショップには、20名ほどの子どもたちとその保護者たちが集まってくれた。父母だけでなく、祖父母もいて、総勢50名は超えただろう。福島の子ども連れは、多くが週末ごとに県外へ出て、子どもたちを外で遊ばせているのだという。市内に安全な公園があっても、行く途中にホットスポットが散在しているので、子どもだけで外に出すことができない。そんななかで、子どもを持つ親たちは、屋根のある無料の遊び場情報に敏感なのだろうという話だった。

私自身は、「クリスマスカレンダーを作ろう」のプログラムをやったが、かわいい子どもたちが、それぞれに迷いながら工夫を凝らして個性的なツリーを飾り、お菓子を貼りつけていく様子は何とも愛おしかった。楽しいクリスマスがやってきたらいいなと願う。

東京おもちゃ美術館から頂いたおもちゃは、子どもにも大人にも好評で、とくに、崩れた時に世界で一番美しい音がするという積み木カプラは大人気だった。



来てくださった家族を見ていると、保護者の暖かい眼差しに見守られて、子どもたちは、どちらかと言えばお行儀よく遊んでいた。危機を感じるからこそ家族の一体感が高まり、統制された状況下にあるだろうことを感じて切なくなった。養護施設でも、ふだん連絡を取ってこない親たちが、「子どもは安全なのか？」と聞いてくるという。不安な状況だからこそ、人は自分にとって本当に大切なものは何なのかという原点に立ち戻るのだろう。それが生きていくうえでの大きな力になる一方で、このような状況のなかで、どのように日常性を取り戻していくことができるのか。

支援者たちも、日々悩みながら、精一杯、踏ん張っておられた。子どもや保護者の前では笑顔で対応し、陰で泣くのだという。心のなかに黒い思いが渦巻いているが、おいそれと不用意な発言はできないし、吐き出すところがなく「放射線に対処していいのか」といった相談が多く持ち込まれる。放射線についての研修などもあるが、結局、「帰ったら手を洗うことや、規則正しい生活を送ることを心がけてください」くらいしか言えない。保護者や利用者から「本当に大丈夫なんですね？」と問われ、「安全だと言われています」と答えながらも、自分自身だって確信を持ってない。この状況のなかで、確信を持てる人などいるだろうか。

放射能の専門家が完全防備で検査に来て、「大丈夫です。これで病気になることは絶対にありません」と言いながら、逃げるように帰っていくのを見ると、「さっき安全だと言いましたよね？」と言いたくなる。基準が不明確なので、避難するかしないか、

何を食べるか食べないか、それぞれが判断するしかない。危機意識の違いが、友達同士、家族同士に溝を作り出している。家族の食卓も別々になったという話もあった。

支援者支援セミナーで、支援者として、あるいは親としての役割からしばし離れて、「私」のことを考えたり、語ってみてはどうだろうかと思ってみると、「本当にそれが許されるなら、王様の耳はロバの耳じゃないけど、穴を掘って叫びたい。真黒いものが心にいっぱいたまっている」とおっしゃった。それから、皆で、ささやかな楽しみや変わらずあるものについて分かち合った。趣味のサークル活動が続いていること、今年はクリスマスツリーを早めに出して、子どもたちに「今年もサンタさんが来るよ～」と伝えたという話も出てきた。

毎年、2千個の干柿を作って、友人知人に配ってきたという男性が、12月8日の検査でOKが出たら今年も作るのだと話してくれたのを聞いて、眼の前に、青空を背景に干柿が吊るされているのどかな光景が浮かんだ。「検査がうまくいって、干柿作れたらいいですね…」と言うと、「できたら少し送りますよ」と言ってくれた。「どうか、無事に干柿ができますように」と祈りながら年越しをしたら、年明け、大きく輝くような干柿が届いた。それまで食べたことがないような甘くておいしい干柿だった。

<文献>

一般財団法人とうほう地域総合研究所『福島への道』2011年8月参照。

大島堅一・除本理史(2011)『原発事故の被害と補償～フクシマと“人間の復興”』大月書店